

感染症科

● スタッフ（2022年10月1日現在）

診療科長 渡邊 秀裕
 医局長 中村 造
 病棟医長 藤田 裕晃
 外来医長 小林 勇仁

医師数 常勤 12名
 非常勤 3名

● 診療科の特徴

感染性疾患の原因は細菌、ウイルス、寄生虫など多様であり、疾患としても、肺炎や尿路感染症などのように感染臓器が特定されるものから、菌血症や種々のウイルス感染症などのように特定の臓器に感染が限定されず全身に及ぶものまで様々です。そのため、当科の診療対象となる疾患は、以下のとおり多岐にわたります。

一般細菌感染症：菌血症、細菌性髄膜炎、脳膿瘍、咽頭炎、扁桃炎、扁桃周囲膿瘍、眼内炎、定型肺炎、非定型肺炎、膿胸、肺化膿症、感染性心内膜炎、縦隔炎、胆嚢炎、胆管炎、肝膿瘍、感染性腸炎、憩室炎、虫垂炎、腎盂腎炎、膀胱炎、前立腺炎、精巣上体炎、骨盤内炎症性疾患、化膿性椎体炎、化膿性関節炎、骨髄炎、筋膿瘍、蜂窩織炎、壊死性筋膜炎、創部感染症、カテーテル関連血流感染症、化膿性血栓性静脈炎、多剤耐性菌感染症など

抗酸菌感染症：非結核性抗酸菌感染症、肺結核・肺外結核
 ウイルス感染症：COVID-19、EBウイルス感染症、サイトメガロウイルス感染症、インフルエンザウイルス感染症、成人麻疹・風疹・水痘・帯状疱疹、HIV感染症（急性感染、HIV関連日和見感染症およびAIDS、免疫再構築症候群などを含む）など

真菌感染症：カンジダ、アスペルギルス感染症など

原虫・寄生虫感染症：アメーバ症、ジアルジア症、日本海裂頭条虫症や囊虫症などの寄生虫症など

性感染症：HIV感染症、梅毒、淋菌感染症、クラミジア感染症、単純ヘルペス感染症など

輸入感染症：マラリア、デング熱、チクングニア熱、腸チフス、レプトスピラ症、リケッチア症、渡航者下痢症など

不明熱：原因不明ならびに持続する発熱や炎症反応

● 診療体制と実績

前述のように感染性疾患は特定の臓器に感染が限定されず全身に及ぶことも多く、また感染臓器がすぐに判明しない場合も少なくありません。このため、時として受診する診療科の選択が難しい場合があります。当科では、不明熱やいわゆる炎症反応の高値といった症例も含め臓器横断的に患者を受け入れ、幅広く正確な内科診療をベースとして、感染症診療を行っています。必要に応じて他科とも緊密に連携し、常に患者にとって最善のゴールへ向かうような診療を心がけています。

対象疾患は、肺炎・椎体炎などの細菌感染症、排菌の

ない結核や非結核性抗酸菌症、マイコプラズマなど非定型病原体による感染症、HIV感染症・梅毒・クラミジア・淋病などの性感染症、デング熱・腸チフスなどの輸入感染症、寄生虫疾患など多岐にわたり、様々な症例の診療実績があります。コロナ禍に突入して以降、COVID-19に対しても当科がリーダーシップをとり、他診療科と連携のうえ病院全体で診療に当たっています。また、発熱・炎症の原因が感染性疾患でないことも多いですが、その場合に専門的観点から感染性疾患を除外し、非感染性疾患のあたりをつけて専門家紹介までつなげることも当科の重要な役割です。薬剤師や微生物検査技師、ソーシャルワーカーなどの多職種とも緊密に連携し、多方面からの全人的な診療を心掛けています。感染性疾患においては、地域の疫学的な観点も非常に重要です。そのため、保健所をはじめとした地域連携の構築も積極的に行っております。

当科の役割は診療のみにとどまりません。薬剤耐性菌や各種ウイルス感染症などの院内伝播を未然に防ぎ、患者の予後悪化を防ぐため、院内感染対策にも非常に力を入れております。看護師・薬剤師・微生物検査技師をはじめ多職種で一丸となって、患者に安全な療養環境を提供すべく日々活動しており、その規模は国内有数です。また近年、感染対策においても地域および関連医療機関との連携は重要視されており、その点でも当科は指導的役割を担っています。

